

有言実行の19位完走

チームもマシンも成績も ステップbyステップで進化する

フーターズやKTM、俳優齊藤祥太さんとのコラボなどで参戦初年度から話題を提供してきたオーファとベビーフェイスの共同チームヤマハYZF-R1にスイッチし、さらに着実に成績を残した2017年。今年は中堅二人のライダーを擁し、20位以内を目指してチーム一丸となり戦った

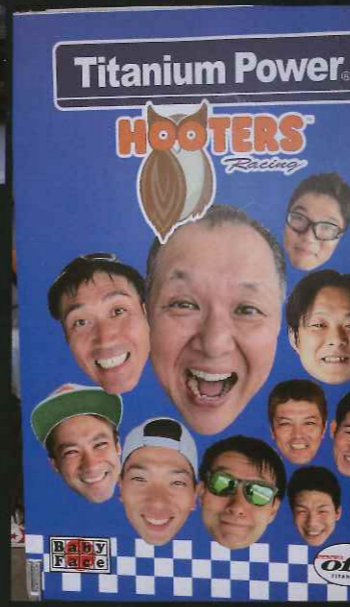
写真/赤松 孝、長野浩之、山下博央、RIDINGSPORT 文/山下博央



後方右がオーファ細川氏。後方中央がベビーフェイス佐藤氏。そして今年も俳優の齊藤祥太さんが応援と手伝いに駆けつけてくれた



スタートとチェッカーライダーも務めた津田一磨。序盤の2分13秒067がチームのベストタイムとなった



を延長してフロントへの荷重を増やし、フロントの接地感を上げた。走行中にメーターが光の反射で見づらいというライダーの意見には、対策としてメーターバイザーを製作し取り付けるなど、少しずつ課題を解決していく。「僕たちのリクエストで、今年は足回りを大きく変更してくれています。それ以外にもメーターバイザーなど、僕らがリクエストすることにはすぐに対応して、ハーツを造ってきてくれますし、それができるのもこのチームのすごいところだと思います」(津田)

また、大きな課題の一つだったピット作業の時間短縮は、新しいクイックチェンジシステムをベビーフェイスが製作し、オーファもクイックチャージャーを新設計。昨年の平均28秒から18秒へと大幅に短縮することに成功している。こうして、一つ一つ課題を解決しながら、今年の鈴鹿8耐に臨んだのだ。パドック側から出入り口やピット前にはライダーとチームスタッフが笑顔の写真が並んだポスターが張られるなど、明るい雰囲気が出されていた。このポスターの仕掛け人は細川氏。徳留はチームについてこう話している。「(ベビーフェイス代表でチーム監督の)佐藤さんや細川さんたちが和やかな雰囲気、みんなが楽しめるようにしてくれて。しかも、みんなが楽しめるようにしてくれて。しっかりと引き締めるから、レースを楽しんでいる感じがうかがえます。今まではヒリヒリとした雰囲気が漂ったチームが多かったですが、ここではすごく楽しいし、だからこそ結果を出そうという気持ちにもなれました」(徳留)

迎えた決勝レース。24番手スタートからスタートしたチタニウムパワー・フーターズレーシングは1時間経過時点で27位だったが、



2009年にヨシムラで8耐優勝の経験を持つ徳留和樹。今年からチームに加わった。もう一花咲かせたい、実力あるライダー



チーム2年目の津田一磨。全日本JSBにもスポット参戦し、準備をしてきた。8耐では青腕章をつけ、チームを引っ張った

二人体制で4スタントを担当した徳留和樹。2分13秒446が決勝中のベストタイム。自分の仕事をしっかりと確実にこなした

Baby Face
ゴールドカラーのバックステップが特に有名なベビーフェイスでは、様々なアフターパーツを製造、販売している。鈴鹿8耐にはベビーフェイス代表の佐藤勝彦氏が監督を務め、金属を扱うメーカーのオーファと共に2014年から参戦。着実に結果を出しており、さらに実戦からのフィードバックを製品造りにも生かしている。〒584-0066 大阪府富田林市錦織北1-5-3 Tel.0721-24-8882 <http://www.babyface.co.jp/>

これは今年の課題となっていた乗りやすいマシン造りの効果も大きいところだろう。しかし、順調に見えた今年の8耐でも、燃費に関しては不安があったという。「元々燃費はよくなく、レースまでにきちんとしたデータも取れていなくて、決勝レースで最終確認することになってしまいました。ただ、スタートから2スタント走らせて燃費も把握できたので、ライダー二人には燃費を考慮した想定タイム内で淡々と走ってもらいました」(佐藤氏)

公式予選で津田は11秒台、徳留は12秒台をマークしているが、決勝レースは燃費重視で13秒から14秒台で淡々と周回を消化。チームとしてはトップチームと同じ4回ピットも目指したが、さすがに難しいため8回ピットとした。ピット作業では大きなミスもなく、ライダー二人もミスもなく走り、最終的に19位でチェッカーを受けた。昨年からの目標としていた20位以内完走を果たした。

「とにかくライダー二人が指示を守って淡々と走ってくれた。ピット作業も全くミスなく彼らをコースに送り出せ、目標を達成することができました。既に来年に向けての課題も見えていて、一番の課題は燃費です。でも、解決策はある程度思いついているので、来年の目標は7回ピットを実現するための13秒台で27周できるマシン造りです」(細川氏)

毎年、課題を解決しながら今年も19位まで順位を上げたチタニウムパワー・フーターズレーシング。既に来年に向けての課題も見えており、その解決策をベビーフェイスと共に取り組んでいくことだろう。来年はこのチームがどんな順位でチェッカーを受けるのか。今から楽しみでもあるのだ。

3時間経過時点で20位、そして5時間経過時点では19位と順位を上げていく。今年もライダー二人での参戦となったが、フィジカル面では全く問題はなかったという。「一磨はお兄ちゃん、津田拍也」と一日で400km近く自走で走るトレーニングをこなしているし、和樹もオフロードでトレーニングをしている。しかも、レースウィーク中も毎朝ホテルの周りを2時間くらい走っていて、さすがにやめると言ったんですが、この方が落ち着くとやってやめませんでした」(ベビーフェイス佐藤勝彦氏)

特に取り組んだのはスイングアームの改良だ。フロントタイヤの接地感を増やしたいというライダーの要望を受け、スイングアーム

アメリカ生まれのスポーツバー「フーターズ」のカラリングでおなじみのこのチーム。昨年まではフーターズカラーのオレンジを基調としていたが、今年からは「チタニウムパワー・フーターズレーシング」とチーム名を改め、ブルーが主体のカラリングに変更された。「チタニウムパワー」はチームの母体となるオーファのチーム名で、現在はMFJカップのJPF250に参戦していることから、鈴鹿8耐でも「チタニウムパワー」で統一した形だ。チームの活動をサポートするのはバックステップで有名なベビーフェイスで、マシンのメンテナンスやチューニング、パーツ開発などのテクニカルサポートを行なう。

チームは4回目の8耐参戦。過去3回でもしっかりと成績を残しているのがこのチームの特徴だ。初参戦だった14年はKTMのRC8Rで46位完走。15年もRC8Rで31位へと大幅に順位をアップさせている。さらに、16年からはヤマハYZF-R1にスイッチして22位と着実に成績を残している。その秘訣をオーファの代表で、チームオーナーでもある細川寿二氏がこう話す。

「8時間を走ることで毎年課題が見えてきます。それらを少しずつでも解決すれば、順位も上がっていくものだと思います。昨年の8耐でもいろいろな課題があり、目標とした20位以内は果たせませんでした。だから、今年はその課題を解決しながら、昨年果たせなかった目標の20位以内を目指したのです」

今年もラップタイムの向上はもちろんのこと、乗りやすいマシン造り、ピット作業時間の短縮なども課題として挙げており、チームは早くから解決のために動き出していた。今年も8耐には昨年からのチームに参戦する津田一磨と、ヨシムラで8耐の優勝経験がある徳留和樹のペアで挑んだが、これも早い段階で決定した。また、津田は全日本に参戦しながらマシンの改良に取り組み、徳留も早い段階からYZF-R1に乗り始め、全日本第5戦オートボリスには津田と共にスポット参戦するなど、精力的にマシン開発を進めていく。